

回復に向かうアセアン経済と日系企業

さる5月、研究員とともにシンガポール、タイ、ベトナムの日系企業、ジェットロ、研究機関等を訪問し、最近の経済動向、日系企業の経営状況等の現地調査を行った。

アセアン経済は1997年の通貨危機後の不況から素早く立ち直り回復を続けていたが、2001年に入りアメリカのIT不況の影響を受けて各国とも一転失速し、経済成長率は2000年の5.9%から2001年には1.9%に低下した。特にIT製品輸出を中心に高い成長を続けたマレーシア、シンガポールの落ち込みが激しい。

しかし本年に入りアメリカ経済の回復を受けた輸出の増加と域内貿易の着実な増大によりアセアン経済は再び回復に向いはじめたものとみられる。

今回訪問した企業、研究機関等の景況感も同様であり、またジェットロが本年4月に調査した日系企業のDI（業況感）でも各国で先行きの業績向上を見込んでいる。

今回調査の目的に、最近の日本企業の中国進出ブームの中で、アセアン諸国は日本にとって今後どう位置付けられるのか、また進出日系企業はどのような戦略を有して経営を行っているのか等につき把握することがあった。

私なりに今回確認できたことを4点あげてみたい。第1は、今後の世界生産の増加と先進諸国からの生産シフトは中国、アセアン双方で分担するであろうこと、第2は、中国への生産集中リスクを回避するためにアセアン拠点は極めて重要であること、第3は、アセアンは基本的には自動車、エレクトロニクス、石油化学、食品産業等の輸出基地と位置付けられる。ただし、中長期的には地域内需も十分期待できること、第4は、地場メーカーの未成熟により現地調達比率が低いのが難点であるが域内関税低下により域内調達率が高まりつつあること、また日本からの部品メーカーの進出が増加していることから競争力の一段の強化が期待されることである。

今回訪問した日系企業は家電、化学、繊維、食品等であるが、それぞれ通貨危機を無事切り抜け順調な経営を行っている。また今後の中国製品との競争激化を予想しているが、スピード経営の徹底、高付加価値化による差別化、一段のコストダウンにより十分対応可能との強い自信を有している。

また最近の日本企業の進出としては、タイへの自動車部品等中小企業の進出が目立つほかベトナムへの進出が再び増加傾向を示し、2001年度の日本からの投資額は前年比倍増したことが注目される。

最後にアセアン諸国における現地ジェットロが、日本からの新規進出企業に対し大変親身なサポートとアドバイスを行っていることが印象的であった。

（社長 栗林 直幸）